

# 令和元年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第7号（4月予報）

令和2年3月25日 秋田県病害虫防除所

<b>【内容】</b> Ⅰ. 予報の要点 Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報 Ⅲ. 発生予報と防除対策 Ⅳ. 気象予報 Ⅴ. 気象データ Ⅵ. 用語の説明	<b>【問合せ先】</b> 秋田県病害虫防除所 018-881-3660 秋田県農業試験場 018-881-3326 秋田県果樹試験場 0182-25-4224 かづの果樹センター 0186-25-3231 天王分場班 018-878-2251
<b>【お知らせ】</b> ◇今回の予報対象期間は4月を主とします。次回の発表予定は令和2年4月28日です。 ◇病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のホームページで閲覧できます。 <a href="https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/">https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/</a> ◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬があります。使用制限となる農薬の変更情報は秋田県のホームページで確認してください。 <a href="https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/">https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/</a> ◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関に相談してください。最新の農薬登録状況の検索や、登録・失効農薬情報は独立行政法人農林水産消費安全技術センターのホームページで閲覧できます。 <a href="http://www.famic.go.jp/">http://www.famic.go.jp/</a> ◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのホームページで読者登録できます。 <a href="http://www.e-komachi.jp/">http://www.e-komachi.jp/</a>	

## I. 予報の要点

水 稲	<p>苗いもちはやや多いと予想されます。育苗施設近傍や施設内に稲わら・籾殻を置かず、種子消毒と育苗期いもち防除を必ず実施してください。また、県内の採種ほ産種子以外を使用する場合は、種子消毒と育苗期いもち防除を確実に実施してください。</p> <p>もみ枯細菌病と苗立枯細菌病はやや多いと予想されます。出芽器・育苗箱などは十分洗浄し、「ケミクロンG」などで消毒してください。被覆期間を過剰に長くせず、出芽後の再被覆は行わないでください。</p>
果 樹	<p>りんごでは、腐らん病の発生が多く、黒星病の感染時期が早いと予想されます。腐らん病の対策は注意報第3号を参照してください。黒星病の展葉期防除については、防除対策情報第9号を参照してください。</p> <p>なしでは、黒星病の感染時期が早いと予想されます。防除対策情報第10号を参照してください。</p> <p>りんご黒星病となし黒星病対策に使用するEBI剤やSDHI剤等については、耐性菌対策のため必ず保護殺菌剤を加用し、使用回数にも注意してください。</p>

## Ⅱ. 主要病害虫の向こう 1 か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生・感染時期	発生・感染量	
				現況	予報
水 稲	苗いもち	全県	—	—	やや多い
	苗立枯病	全県	—	—	平年並
	ばか苗病	全県	—	—	少ない
	もみ枯細菌病	全県	—	—	やや多い
	苗立枯細菌病	全県	—	—	やや多い
	褐条病	全県	—	—	やや少ない
りんご	腐らん病	全県	—	多い	多い
	モニリア病	全県	早い	—	やや多い
	黒星病	全県	早い	—	やや少ない
	リンゴハダニ	全県	早い	平年並	平年並
	ハマキムシ類	全県	早い	—	平年並
な し (日本なし)	黒星病	県北部・県中央部	早い	—	平年並
	リンゴハダニ	県北部・県中央部	早い	平年並	平年並
ぶどう	黒とう病	県南部	やや早い	—	平年並

## Ⅲ. 発生予報と防除対策

### A 水稲

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 苗いもち (苗の葉いもちを含む)	—	やや多い (前年よりやや多い)

#### (1) 予報の根拠

ア、前年の穂いもちの発生量は多かった ( /+ )。

#### (2) 防除上注意すべき事項

ア、自家採種せず、県内の採種は産種子を使用する。

イ、育苗施設の近傍や施設内に稲わら・籾殻を置かない。

ウ、種子消毒を行う。種子消毒の注意事項は、「3. ばか苗病」を参照する。

エ、育苗期いもち防除は、次のいずれかの方法で必ず実施し、育苗施設から本田への伝染・発病苗の持ち込みを防ぐ。

①ベンレート水和剤500倍液を箱当たり500mL又は1,000倍液を箱当たり 1 L、播種時～播種 7 日後頃にかん注する。

②ビームゾル500倍液を箱当たり500mL、緑化始期にかん注する。

オ、エ①の播種時処理は、種子消毒に使用するタフブロック又はエコホープD J の防除効果を低下させるため体系処理は行わない。

カ、ビームゾルは使用時期が遅れたり、低温時に使用すると葉先が黄化する薬害を生じる。

キ、本田の葉いもちを対象として床土混和处理又は播種時 (覆土前) 処理を行う箱施用剤は、苗いもち (苗の葉いもちを含む) に対する防除効果がないため、育苗期いもち防除を必ず組み合わせる。

ク、県内でQ o I 剤 (ストロビルリン系剤) に対する耐性菌が確認されているため、本剤は使用しない。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 苗立枯病 (ピシウム菌) (リゾープス菌)	— — —	平年並 (前年並) やや少ない (前年並) やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (ピシウム菌 /-、リゾープス菌 /+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、育苗施設を清掃する。出芽器・育苗箱などは十分洗浄し、「ケミクロンG」などで消毒する。

イ、人工培土を使用する。

ウ、育苗期間の温度管理と水管理を適正に行う。

エ、次の薬剤で防除を行う。

使用時期	農薬名	使用量又は希釈倍数	散布液量 (箱当たり)	ピシウム菌	フザリウム菌	リゾープス菌	トリコデルマ菌	リゾクトニア菌	白絹病菌
播種前	オラクル粉剤 <sup>1)</sup>	10～15g/箱	—	○					
	タチガレエースM粉剤	6～8g/箱	—	○	○				
	ナエファイン粉剤 <sup>2)</sup>	6～8g/箱	—	○	○	○			
播種時	オラクル顆粒水和剤 <sup>1)</sup>	4,000倍	500mL	○					
		8,000倍	1 L						
	ダコニール1000	500～1,000倍	500mL			○			
	ダコレート水和剤	400～600倍	500mL		○	○	○		
	タチガレエースM液剤	1,000倍	500mL	○	○				
		2,000倍	1 L						
	ナエファインフロアブル <sup>2)</sup>	1,000倍	500mL	○	○	○			
		2,000倍	1 L						
	ヘッド顆粒水和剤 <sup>1),3)</sup>	500倍	500mL	○					
	1,000倍	1 L							
ベンレート水和剤	500倍	500mL					○		
	1,000倍	1 L							
ランマンフロアブル <sup>1)</sup>	1,000倍	500mL	○						
出芽後	タチガレエースM液剤	500倍	500mL	○	○				
		1,000倍							
	バリダシン液剤5	1,000倍						○	○
	ランマンフロアブル <sup>1),4)</sup>	1,000倍		○					

1) オラクル剤、ヘッド顆粒水和剤、ランマンフロアブルは、1成分でピシウム菌による苗立枯病を防除できる。

2) ナエファイン剤は1成分でピシウム菌、フザリウム菌及びリゾープス菌による苗立枯病を防除できる。

3) イネミズゾウムシ、イネドロオイムシとの同時防除が可能である。

4) 使用時期は緑化始期までとする。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. ばか苗病	—	少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている ( /-)。

イ、前年の本田での発生量はやや少なかった ( /-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、自家採種せず、県内の採種は産種子を使用する。
- イ、種子消毒を行う。種子消毒の防除効果は浸種水温10～15℃で高いため、水温10℃を確保できる4月上旬頃を目安に浸種を開始する。
- ウ、高濃度短時間浸漬及び低濃度長時間浸漬では、防除効果を高めるために薬液の温度は10～15℃になるように努める。消毒効果の安定・向上を図るため、浸種開始後2日間は水のかけ流し、循環や交換をしない。
- エ、塗沫法及び湿粉衣法による消毒種子又は、消毒剤吹き付け・塗沫済み種子では、種子表面に付着した薬剤が浸種後に水に溶け出し、種子周囲の薬剤濃度が高くなった状態で消毒効果を発揮する。そのため、浸種開始後2日間は種子袋をゆすったり、水のかけ流し、循環や交換をしない。
- オ、種子予措をする予定の作業施設やその周辺を清掃し、伝染源となる稲わら、粃殻、米ぬか、粉じん等を除去する。
- カ、複数の品種や来歴、防除方法の異なる種子を同じ容器で同時に浸種・催芽をしない。また、品種や防除方法が変わるごとに容器を十分に洗浄する。
- キ、消毒前の種子と消毒後の種子を同じパレットやシート等に置かない。消毒後の種子を載せるパレットやシート等は十分に洗浄した清潔なものを用いる。
- ク、周辺からの病原菌の侵入を防ぐため、浸種・催芽時は容器に蓋をする。
- ケ、浸種時の水量は、種子1kgに対し水約3.5Lとし、水温は10～15℃になるように努める。水温が低い場合はお湯で調整する。浸種は水道水、井戸水を用いて水槽で行い、河川や湖沼の水は使用しない。
- コ、浸種期間は浸種水温10℃で6～8日、14℃で6日程度とし、安定した薬効を確保するために、水交換は2～3回とする。
- サ、催芽は30～32℃で行う。
- シ、ハト胸催芽器を使用した循環催芽は、発病が多くなる場合がある。
- ス、出芽までの温度が低いと発病が多くなりやすいため、被覆資材等による保温に努める。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4. もみ枯細菌病	—	やや多い(前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている( /+ )。
- イ、前年、発病が多く確認された地域がある( /+ )。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、育苗施設を清掃する。出芽器・育苗箱などは十分洗浄し、「ケミクロンG」などで消毒する。
- イ、ハト胸催芽器を使用した循環催芽は、発病が多くなる場合がある。
- ウ、所定の播種量を守り、厚播きはしない。
- エ、出芽温度は32℃を超えないようにし、被覆期間を過剰に長くしない。また、出芽後の再被覆は行わない。
- オ、緑化期以降はハウスの開閉をこまめに行い、25℃以上にならないようにする。また、通風を良くし、過湿にしない。
- カ、過湿にしないよう、かん水は午前中に行う。
- キ、種子消毒は細菌病に効果のある薬剤を使用し、「3. ばか苗病」の防除上注意すべき事項を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 苗立枯細菌病	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、「4. もみ枯細菌病」を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. 褐条病	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、近年の発生量はやや少なく推移している（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ハト胸催芽器を使用した循環催芽は、発病が多くなる場合がある。

イ、出芽温度が30℃を超えないようにする。

ウ、緑化期以降は通風を良くし高温、過湿にならないようにする。

エ、種子消毒は細菌病に効果のある薬剤を使用し、「3. ばか苗病」の防除上注意すべき事項を参照する。

## B りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 腐らん病	—	多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、3月1～3半旬の巡回調査における発病樹率は3.4%（平年1.2%）、発病地点率は40.9%（平年17.5%）でいずれも高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、3月19日発行の農作物病虫害発生予察情報注意報第3号を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. モニリア病（葉ぐされ）	早い（-）	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、果樹試験場（横手市）における発芽は、「つがる」は3月21日（平年4月6日）で16日早く、「玉林」は3月22日（平年4月6日）で15日早かった。（- / ）。

ウ、前年の実ぐされ発生量はやや多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ひこばえは伝染源となるため剪去する。

イ、葉ぐされは見つけ次第摘み取り、焼却するか土中に埋める。

ウ、例年、発病の見られる園地では、展葉期頃にオルフィンフロアブル、ストライド顆粒水和剤、デランフロアブル、ネクスターフロアブル、パスポート顆粒水和剤、フルーツセイバー、ベフラン液剤25のいずれかを散布する。

エ、発生が少ない場合は、開花直前にアンビルフロアブル、インダーフロアブル、オンリーワンフロアブル、サンリット水和剤、ネクスターフロアブル、フルーツセイバーのいずれかを散布する。

オ、発生が多い場合は、発生盛期（開花1週間前～開花直前）にトップジンM水和剤を散布する。

なお、展着剤ニーズを加用すると効果が高くなる。

病虫害名	予報内容	
	感染時期	感染量
3. 黒星病	早い（-）	やや少ない（-）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、果樹試験場（横手市）における発芽は、‘つがる’は3月21日（平年4月6日）で16日早く、‘玉林’は3月22日（平年4月6日）で15日早かった。（- / ）。

ウ、前年の発生量はやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、展葉期防除については3月23日発行の農作物病虫害防除対策情報第9号を参照する。

イ、開花直前と落花直後の薬剤は過去2年間の発生状況に応じて以下のとおり選択する。

①過去2年間に発生がなかった園地では、開花直前と落花直後にE B I 剤（アンビルフロアブル等）を使用できる。E B I 剤を使用する場合は、耐性菌出現を回避するため、使用回数は年2回以内とし、必ず保護殺菌剤（チオノックフロアブル、ジマンダイセン水和剤等）を加用するか、これらの混合剤を使用する。

②過去2年間に発生があった園地では、開花直前にS D H I 剤（オルフィンフロアブル等）、落花直後にユニックス顆粒水和剤47を選択する。S D H I 剤やユニックス顆粒水和剤47を使用する場合は、耐性菌出現を回避するため、必ず保護殺菌剤（チオノックフロアブル、ジマンダイセン水和剤等）を加用する。

ウ、開花期前後の散布間隔は10日以内とし、散布予定日に降雨が予想される場合は降雨前に散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. リンゴハダニ	早い (-)	平年並 (-)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている(-/ )。

イ、3月1～3半旬の巡回調査における越冬卵の寄生短果枝率は0% (平年2.5%)、寄生地点率は0% (平年3.6%) でいずれも平年並であった( /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発芽前に防除ができなかった場合は、展葉期までにスプレーオイル、トモノールSもしくはハーベストオイルの100倍液を散布するが、前年に発生がなく越冬卵も確認されなかった園地では省略してもよい。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. ハマキムシ類	早い (-)	平年並 (-)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている(-/ )。

イ、前年5月～収穫前の巡回調査において被害は確認されず平年並であった( /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、展葉期頃にエルサン水和剤40を散布するが、前年の発生が極めて少なかった園地では省略してもよい。

## C なし (日本なし)

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
1. 黒星病	早い (-)	平年並 (-)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(-/±)。

イ、3月23日現在、果樹試験場(潟上市)における幸水の予測発芽日は4月1日(平年4月9日)で8日早く、今後、気温が高く推移すると発芽はさらに早まると予測される(-/ )。

ウ、前年9月中旬の果そう葉の発病葉率は平年並であった( /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、3月25日発表の農作物病虫害防除対策情報第10号を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. リンゴハダニ	早い (-)	平年並 (-)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (-/ )。

イ、2月下旬～3月上旬の巡回調査における越冬卵の寄生短果枝率は0% (平年0.2%)、同地点率は0% (平年2.7%) でいずれも平年並であった ( /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、前年秋期に発生が見られた園地や越冬卵が見られる園地では、発芽前にアルタベールフロアブル40倍又はハーベストオイル50倍液を散布する。

## D ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	感 染 量
1. 黒とう病	やや早い (-)	平年並 (-)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (-/ )。

イ、前年7月の発生量は平年並であった ( /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、伝染源となる前年の被害枝 (結果母枝) や巻きひげは切り取って処分する。

イ、前年に発生が見られた園地では、発芽前にデランフロアブル200倍、パスポート顆粒水和剤250倍、ベフラン液剤25 250倍、ベンレート水和剤200倍、ベンレートT水和剤20 200倍液のいずれかを散布する。

ウ、シャインマスカットなどの欧州系品種とスチューベンは感受性が高いため、休眠期の防除を徹底する。特に、苗木の植え付け当年は新梢の被害が大きくなりやすいので注意する。



## IV. 気象予報

### 令和2年3月19日仙台管区気象台発表 東北地方1か月予報（3月21日～4月20日）

#### （1）予想される向こう1か月の天候

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

東北日本海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率80%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率70%です。3～4週目は、高い確率50%です。

#### （2）向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間の各階級の確率

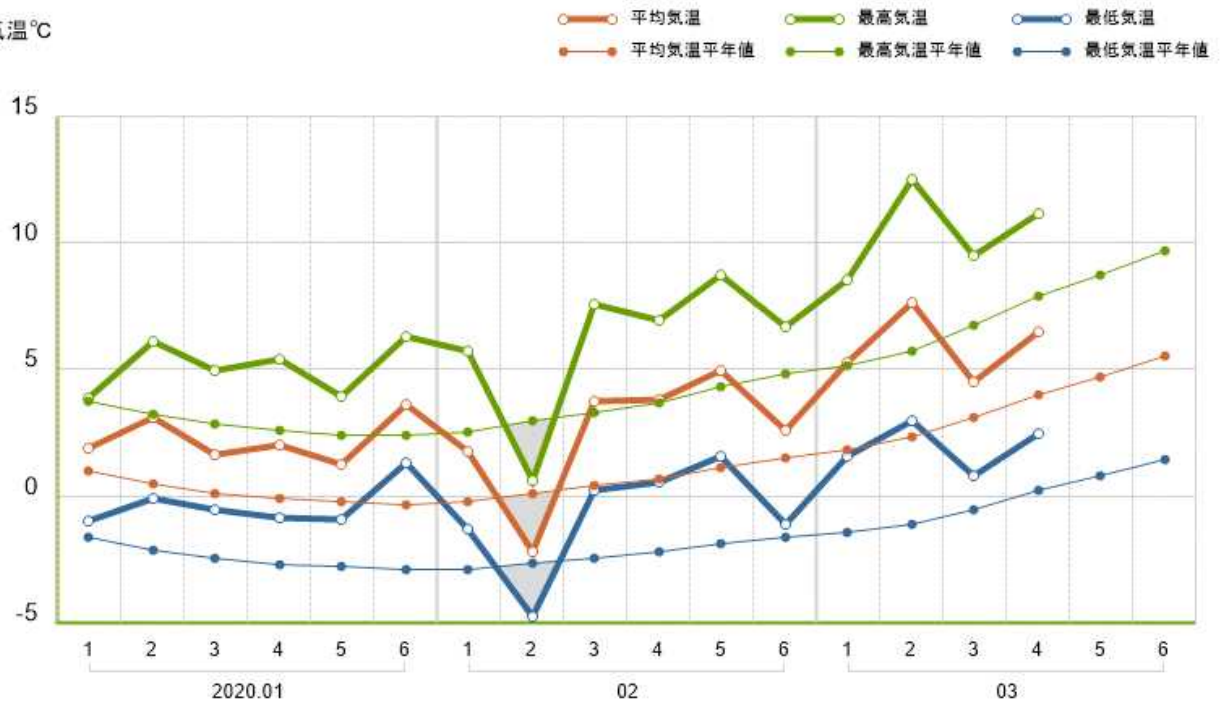
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
平均気温	10%	10%	80%
降水量	30%	30%	40%
日照時間	40%	30%	30%

#### （3）気温経過の各階級の確率

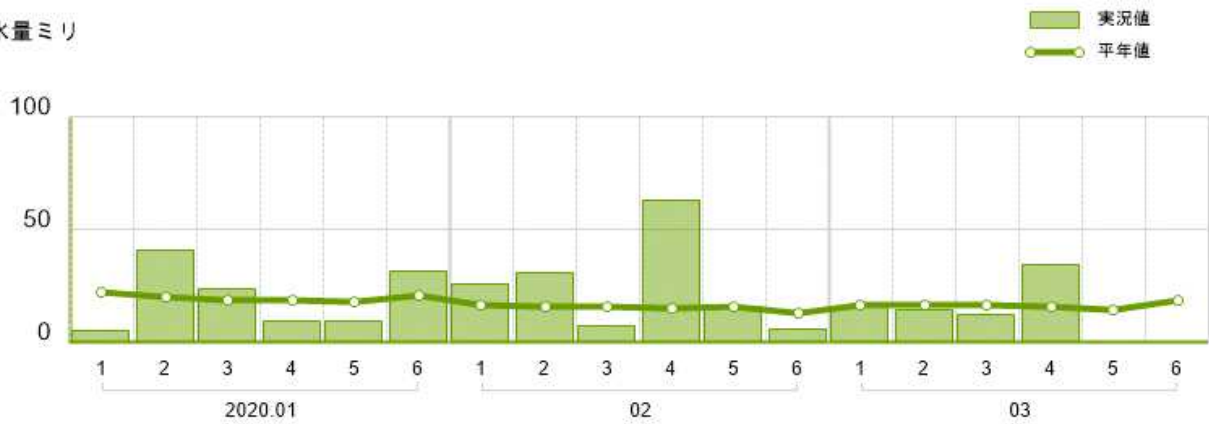
	低い	平年並	高い
3/21～3/27	10%	10%	80%
3/28～4/3	10%	20%	70%
4/4～4/17	20%	20%	50%

## V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～3月4半旬 秋田県農業気象システムより)

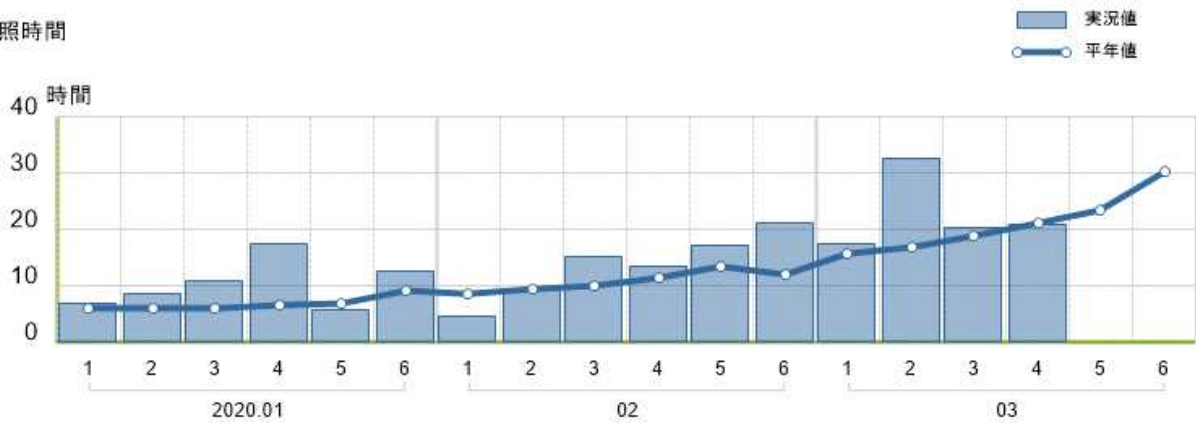
気温℃



降水量ミリ



日照時間



## VI. 用語の説明

### 発生時期

平年の発生日日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

### 発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

平年値 ↓						
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

### 予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

### 気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上 (20:40:40)	高い(多い) 平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上 (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	平年並 ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

### 半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

## 水稲育苗終了後に野菜類・花き類を作付けする場合の注意

水稲育苗終了後に野菜類・花き類を作付けする場合は、育苗箱の下に不透水性無孔シートを敷いて、育苗期に施用した農薬がハウス内土壌に浸透しないようにしてください。

薬剤を移植前～移植当日に処理する場合は、育苗施設外で散布してください。

詳細は、令和2年度版秋田県農作物病害虫・雑草防除基準を参照してください。

## 農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

### ○安全使用の基本事項

- ・農薬の使用基準を遵守する。
- ・病害虫の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
- ・防除履歴を必ず記録する。

### ○農薬使用上の注意

- ・農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させない。
- ・家畜・蜜蜂等に影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類等を散布前に十分周知する。
- ・農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
- ・特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
- ・農薬散布時の装備と体調は万全にする。

### ○農薬の取扱い上の注意

- ・農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
- ・農薬を他の容器（清涼飲料水の容器等）へ移し替えない。